

宮本先生の日記に思う

安芸 皎一*

このあいだ宮本武之輔先生の膨大な日記の写真オフセット印刷による貴重な資料が刊行された。この日記は、先生が18才のとき、中学生として人生に目覚めてから50才で企画院次長として急逝されるまでの32年間のほとんど完璧な日記であり、明治40年4月から昭和16年12月にわたるものなのである。それに、余録としてお若いころ書かれた作文が添加されている。これは原文の写真版であることから、あとを続けるのにちょっとむづかしいところもあるのではあるが、かえって先生のためまざるご努力、お心づかいがしのばれて、先生への思い出をより深くするのであった。この刊行は先生が興亜院の技術部におられたときにご一緒しておられた本多静雄氏と笹森巽氏の心からのご配慮によるものなのであって30年にわたってよくこれを保管せられ、今回刊行の運びとなったのであり、本当になんといったらよいか、心からの感謝にたえないしだいである。そして、これはまた考えてみると、宮本先生の偉大な指導力のもとにつかわれた成果ではないかと考えられるのであり、ここに、また先生のすばらしい業績を思いだすのであった。

宮本先生は専門のお仕事のうえに、技術者としての立場というか、技術者がその与えられた責務を本当の意味で効果的にはたすためには、より広い立場から私たち自身の仕事をみなければならぬということから、時流に

* 名誉会員 工博 関東学院大学、拓殖大学教授

さがけて技術者運動の指導者となられ、大きな役割をはたされたのであった。これが今日なお広く、多勢の技術者のなかから先生の業績が強く支持されているものということができるのである。

私が宮本先生と最初に接触する機会を持ったのは、先生が信濃川の大河津分水路の流頭部に設けられたベアー・トラップ堰が下流部の洗掘によって流亡したあとに、普通の引揚扉をもつ堰に改築されたとき、責任者として現場におられたときのことであった。このベアー・トラップ堰はアメリカ合衆国のオハイオ河に以前から設けられていたものであるが、これを信濃川の現状に適應するよう二枚扉のものを三枚扉に改めて築造されたものであり、技術的にはきわめてすぐれた珍しいものであったのである。しかし、それが調節堰の河道内での全体の配置からいって、高水敷の部分では固定堰がつくられていたことなどから、ベアー・トラップ堰の下流側に渦が発生し洗掘をみたのであって、先生は「たしかにこの新しい堰は全く古い形式のものではあるが、このような場合には全体の流れを最も安定した形で放水できるように考えるべきではないか」といわれたことは、私にはいまでもはっきり記憶に残っていることなのであった。その後、興亜院ができたときに先生が興亜院の技術部長になられたとき、私に來ないかといわれたのであったが、当時の内務省土木局のほうにも手ばなせない用があり、やむをえず併任の形で興亜院に勤めるようになったときのことであった。そのときの私の仕事は中国本土の河川の調査ということであって、私は昭和14年から6年間にわたって13回現地に出張し、永定河から黄河、さらに揚子江にわたって調査をつづけたのであった。

このとき、初めに宮本先生にいわれたことは、「こういうところに行くのであるから無理をしなくともよい、た

●宮本武之輔氏のこと

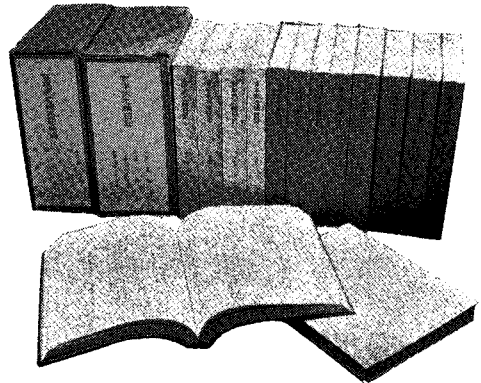
宮本武之輔氏は、愛媛県温泉郡興居島村由良の宮本藤次郎の長男として、明治25年1月に生まれた。小学校卒業後、ただちに沿岸航路客船の少年給仕となったが、窪内石太郎氏の援助を得て上京し、錦成中学に入りさらに、一高、東京帝国大学の土木工学科を経て、大正6年に内務省に奉職した。

若くして衆目をあつめ、大正年代と昭和の前年代にわたって、工政会、日本技術協会などに寄り、わが国の技術者、とくに官僚技術者の先駆として重きをなした。

また、名文をもって鳴り、その日記は、日常事を記録するばかりでなく、同時代における技術界の動向をあますところなく伝え、わが国の技術史・文化史の貴重な資料であると信ずる。

同氏の死後、本多静雄・篠原登・笹森巽氏が協力して30年間これを保管し、かろうじて戦災と散逸を免れた。

(同日記の本多静雄氏になる箱書より抄録した)



膨大な容量を示す宮本武之輔日記

だ私としていいたいことは、中国の河川について、だからでも聞かれたら、なんでも返事のできるようになっておれ」というご指示をいただいたのであった。これは私には本当に強く印象づけられたことなのであって、これは河を本当に多面的にみよということであり、地域の開発という立場から河川の問題に接近せよというご主旨と理解したのであった。これは、その後の私の河川の見方の大きな指針となったのであった。

私はこの宮本先生のすばらしい日記を前に、かつて先

生からいただいたご指導を、心から思いかえすのであった。先生がお若くして亡くなられたことを思うと、本当に残念でならないのである。この膨大なお若いときから最後まででの日記は、私たちに技術者としての道を再確認させてくれるに違いない。私は、ここでふたたびこの意義ふかい先生の日記を刊行して下さった本多さん、笹森さんに心から感謝の意を表するしだいなのである。

(本書についての問合せ先)

名古屋市中央区大須 3-5-13, 長谷ビル内 宮本武之輔日記刊行会

ダム基礎岩盤グラウチングの施工指針

900 円
会員特価 800 円 (〒 90)

土木技術者のための岩盤力学(第3版)

3 600 円
会員特価 3 000 円 (〒 200)

市街地土木工事の仮設と安全対策

2 200 円
会員特価 2 000 円 (〒 170)

土木技術者のための法律講座

1 000 円
会員特価 900 円 (〒 140)

土木技術者のための振動便覧

2 400 円
会員特価 2 000 円 (〒 170)

新刊
案内

仮設鋼矢板施工ハンドブック

■日本建設機械化協会編 A 5・2500円

本書は鋼矢板に関する設計法、施工法はもちろん、必要とする建設機械の解説から管理に至るまで、すべてを結集した総合的指導書。特に施工に関しては具体例について詳しく解説し、現場ですぐ実務に役立つよう懇切に述べられている。

ねじりを受けるコンクリート部材の設計法

泉 満明著 A 5・1600円

最近、各国で関心の払われている。コンクリート部材へのねじりの問題について、著者の永年にわたる実験の成果と内外の文献を基にまとめあげた数少ない好書。設計業務に携わる実務家にとっては必携の書である。

基礎工(II) ■土木工学叢書

監修 土木学会 白石俊多著 B 5・6000円

著者永年の学識経験を生かし、最新の基礎工技術を多数の具体例をあげ詳述
【主な目次】 緒論/基礎杭/杭基礎の設計/ピヤ基礎/杭基礎の施工法/偏心傾斜荷重に対する安定/ケーソン/ケーソンの設計法/ケーソンの施工法/地下構造物/軟弱地盤中の深い基礎

鉄骨の構造設計

藤本盛久 編著 A 5・2500円

本書は単に部材と接合部の算定に関する記述にとどまらず、これが適正に行なわれるために必要な鉄骨の構造設計の企画から実現までのすべての基本知識を専門家の分担執筆により詳細な解説を加えたもの。



技報堂

東京・港・赤坂1-3-6